

# 名もない実

松田 幸子

子供の頃から野原をかけ周ることが好きだった私は、いつか自分の庭を持ってガーデニングを思い切りやってみたいと思っていました。しかし、なかなか時間が持てず仕事と家事に追われる毎日で今日に到ります。

そんな中、二年程前に機会があり「ピーターラビットの有機栽培検定」というものをインターネットで見つけ、受けてみたところなんとか受かることが出来、それ以来今まで以上に植物に興味を持つこととなりました。

しかし私は、ガーデニングがやってみたいという夢だったので、いつしか野菜栽培や果樹栽培の方に興味を持つようになっていました。

実は二十代の頃にも、いつか自分の畑や庭が持てるようになったら、その頃にたくさんの実がついているくらいに育てようと果樹の接ぎ木や接ぎ芽の仕方が載っている本を何冊か読んだことがありました。

それで検定合格をきっかけに、いちじくの木を一本ホームセンターで買って来たのです。珍しい木でもあり、説明書には写真付きで「白い実」が成ります、との事。『なんとか成ってくれないかなあ……』と思い日々水をあげながら、季節が過ぎてゆきました。

そして三年目の冬、昔読んだ本のことを思い出し、『そうだ、もう一本パートナーを買って来てあげよう。』と私は思い立ちました。いちじくは、五月か六月頃に実をつけることを調べそれまでに暖かくなったら接ぎ芽をしてあげようと思ったのです。

早速次の日近くのホームセンターに行ってみました。しかし、時期のせいはいちじくの木は一本ありませんでした。『そうだ、少し離れたあそのセンターにはあるかもしれない……。』と思った私は、その足で車を回しました。

しかし次のホームセンターにも、いちじくらしい木はみつかりませんでした。

そして私は、最後に隣街のメーカーの異なる一軒のホームセンターを思い出し、行ってみることにしたのです。

そこには、果樹、植木、盆栽など様々な植物が置かれていました。そしてしばらく眺め探しましたが、やはりまたもいちじくの木はありませんでした。

そんな時ふっと、植木と盆栽が一緒に置いてあるコーナーに目が止まりました。そこには、黒いビニールポットに入った一本の木が、ひっそりと置かれてありました。その名もない木には、手書きで298円と書かれた値札が一枚つけられているだけでした。

しかし私はその木を見た時、黄色く小さくなって一枚木に残っている葉を見て、『確か種類はあまり無い方だけど、いちじくの葉に似てる……』と遠い記憶がよみがえりました。

早速その木をそっと手に取り、レジに向かいました。やはりレジを打って頂いても、「その他」としか項目が出ませんでしたがおつりとレシートを受け取り、大切に木を持って帰りました。

『すぐに……。』と思いましたが、もう少し暖かくなってからの方が良いと思い、二、三ヶ月接ぎ芽は待つことにしました。

元々ある白い実の成る木の鉢の横に新しく買って来た木の鉢を置いてあげると、どことなく二つが喜んでくれているように見えました。

春になり暖かくもなり、ようやく接ぎ芽をする日になりました。少しかわいそうな気はしましたが、『ちよつとごめんね……。』と言って、カッターで少しはがし芽と芽を交替し、赤い糸でくるくると固定しました。『これで良し……。立派な実をつけてね……。』と私は心の中で祈りました。

そしてしばらくたった五月の下旬の頃です。最初葉がもう二枚出て来たのかと思いましたが、いちじくの葉の始めはトガっているのですが、丸いかわいいものが二つついているのを見つけました。心の中で『どうか実でありますように……。』と祈り様子を見続けることにしました。

その丸いものは花になって咲くのではなく、そのままの形で日に日に大きくなってゆきました。そして、葉になることもなく、小指の先程の大きさになった時、どう見てもいちじくの実にしか見えない程になったのです。

私は夢のような気持ちでいっぱいでした。白い実の成る木の方の葉は、よく目に

する手を広げたようなはつきりした形なのですが、名もない木の方の葉は、ゆったりとしたハート形をしていて、明らかに種類が異なります。

でも二本の木が一つとなって、名もない木の方に小っちゃな赤ちゃんが生まれました。その実はどんどん大きくなって、秋には二つとも赤い実となりました。

子供がまだいない私は、わが子のような思いです。今年も成ってくれることを祈っています。そして多くの尊い命に祈りを捧げます。

松田 幸子

(まつだ さちこ)

昭和四十三年生まれ 四十五歳

三重県四日市市札場町在住

結婚式場配膳係

市立三重短期大学卒業

フィリピン州立ロンブロン大学名誉博士号

東京大学教養学部後期課程聴講生終了